

# 震災後のアルゲ・バム遺跡 — 修復への道程 —

岡田保良

Arg-e Bam:  
Revitalization after the Earthquake

Yasuyoshi OKADA

キーワード：アルゲ・バム、日乾煉瓦、震災復興、イスラーム都市、ワークショップ

Key-words: Arg-e Bam, mud-brick, earthquake, revitalization, Islamic city, workshop

はじめに

本稿は、2003年末に大震災を蒙ったイランの中世都市遺跡アルゲ・バム（Arg-e Bam）に向けられた、国際的な復興努力の足跡を追いつつ、遺跡の現状を紹介し今後の展望を見極めようとするものである。筆者はイランのイスラーム都市を専らとしているわけではなく、ここで改めて遺跡固有の歴史あるいは建築史的価値を論じる立場でもない。したがって本稿は、研究成果というより学会ないしは現地の動向の報告である。骨子は昨年6月に開催された日本西アジア考古学会大会における発表内容だが、バムの復興、あるいは日乾煉瓦遺構の保存に関するさまざまな国際協調についても極力紹介するよう意を払った。

2003年「土の建築」国際会議（テラ2003）、そしてバム大震災

2003年11月29日から4日間、「土の建築」国際会議がイランのヤズド（Yazd）にある修復間もないダウラタバード庭園を会場として開かれた。通算で9回目、通称「テラ2003（Terra 2003）」と記される。公式名称は、「土の建築に関する研究と保存」第9回国際会議（9th International Conference on the Study and Conservation of Earthen Architecture）である。1972年の第1回と76年の第2回、ともに同じヤズドで開催されているように、本来はイランの伝統建築の継承を念頭に置いて始められた国際会議であった。イスラーム革命後、イランの外で6度開催され、27年ぶりにヤズドに戻っての会議である。日本から発表者が出るのはこのときが初めてで、筆者のほか、埼玉大学の渡辺邦夫教授、豊橋技術科学大学の泉田英雄教授が演壇に立った。そのエクスカージョンの目玉が、アルゲ・バムへのツアーだった。ほとんどすべての建築が日乾煉瓦のみで造られた稀有な町の廃墟として広く知られており、近年イラン政府も観光開発に力を入れている遺跡であ



図1 バムの位置

る（図1）。他にシャフィアバード（Shafiabad）、ライアン（Rayen）城塞なども見学の対象であった。たまたま会議に参加した筆者らは、震災直前まで修復途上にあった城塞都市バムの奇観に接することができた。その後の経緯は以下の通り。

12月26日、午前5：26、震災。マグニチュードは6.5。犠牲者の数字は発表によって若干異なるが、3万人を少し超えるという信じられない値が報じられた。アルゲ・バムも壊滅的と伝えられた（図2）。

2004年1月13日、外務省文化交流部は、文化遺産保存のためのユネスコ信託基金と二国間文化無償協力によりバムの文化遺産救済事業支援を決定。同日、関係識者を集めてタスクフォース会議が開かれた。

同日、日本建築学会では災害委員会の席上、イラン国際地震学研究所（IIIES）のガヤムガミアン（Ghayamghamian）

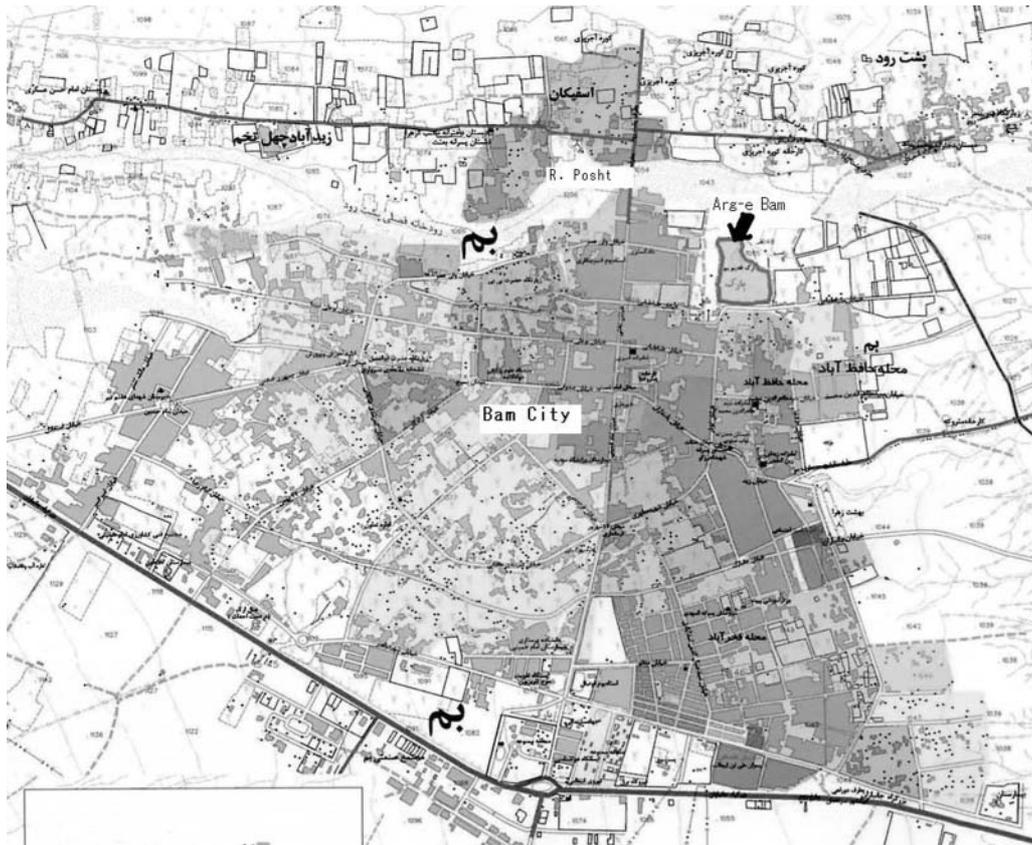


図2 震災範囲とバム城砦

博士から震災状況報告があった<sup>1)</sup>。地震災害に対する日本の学会対応の素早さには敬服する。

文化遺産調査ミッションもあとを追った。1月21日から29日までの第1次ユネスコ・ミッションに、上記タスクフォースの意を受けて埼玉大学渡辺邦夫教授が参加した。他に、ユネスコ世界遺産センターのF.バンダリン(Bandarin)長官、イコモス国際構造補強委員会(イスカルハISCARHA)委員長ジョルジオ・クローチ(G. Croci)ローマ大学教授、グルノーブル建築学院国際土構造物研究センター(クラテルCRATerre-EAG)のウベール・ギヨ(H. Guillaud)教授も加わっている。こうしたミッションの早期実現には、受け入れ窓口のイラン考古遺産庁の迅速な対応と、これをサポートしたユネスコ・テヘラン事務所の谷口純子氏の努力が大きく貢献している。こうしてユネスコの世界遺産センターと信託システムのほか、イコモスまで巻き込んだ後の国際協調体制が出来上がったといえる。

1月25日頃からは約1か月間、文科省突発災害研究チーム、神戸大学調査団、土木、建築、地震各学会調査団がつぎつぎと派遣された。2月23日からの1週間は、それまで受け入れに追われていたイラン文化遺産庁から関係者

3名が来日し、外務省に対するより具体的な支援要請や援助機材の選定を行ったほか、提携関係にある埼玉大学地圏科学研究センターのはからいで震災の報告会を催した。外務省が独自に招聘したものらしい。

3月9日から10日間、第2回のユネスコ・ミッションが派遣された。これには日本から筆者が参加し現地を訪れる機会を得た。他に上記のG.クローチ教授、イコモス本部からデイス・ブンバル(D. Bumbaru)事務局長、クラテルからティリ・ジョフロイ(T. Joffroy)研究員の各氏がこのミッションに加わった。いっこうに回復の目処が立たない中、一段高く聳える中央城郭を中心として崩落被害状況を実見し、被害の形状、復旧への道筋について現地で議論を重ねた。早い機会にワークショップを開催することもこのとき計画され、4月18日のイコモス記念日(Day of Monuments and Sites)の催しとして、その前日から4日間、現地で実施される運びとなった。その内容については後述する。イラン政府とユネスコ事務所では、この時点で6月末に予定されていた世界遺産会議(開催地は中国蘇州)で、危機遺産(Heritage in danger)として世界遺産リストへの登録を実現させようという企てがあったようだ。

### バムの盛衰

ここで改めてバムの地理と歴史を振り返っておこう<sup>2)</sup>。位置は南東イラン、ダシュテ・ルート (Dasht-e Rut) 盆地の西南隅、標高 1,100m。中世にはケルマン (Kerman) を構成する 5 つの地域、バルダシル (Bardasir)・シルジヤン (Sirdjan)・バム (Bam)・ナルマシル (Narmasir)・ジルフト (Djiruft) の一つだった。パーレズ (Barez) 山地の裾にある大オアシスに立地し、イランの中でも最も早くにカナートによる水供給システムが発達した土地である<sup>3)</sup>。かつてバム城塞とその周辺の生命線は 25 本のカナートだった。

町の名は「祈り」を意味するヴェーマ (vehma) に由来するというが、定かでない。初見は 9～10 世紀のアラブの地理書で、サーサーンの人々がケルマンないしイラン南東部に居住を始めた頃にバムの城郭も形成されたい。シーラーズ (Shiraz) から、ケルマン経由シジスタン (Sidjistan)、またはマクラン経由マンスーラ (Mansura) の結節点にあたり、商業地として栄えたほか、ナツメヤシと綿花がバムの経済を支えた。ムカッダシ (Muqaddasi) の地理書によると、「住民は才知に長け、布生産は諸国に知られ、バム近郊で作られた衣類は広くイスラーム世界に好まれた。かくしてアッバース朝時代にバムは広域通商網に組み込まれた」(Gaubе 1979: 100) という。

873 年、ホラサン軍との戦いで拘留地として要塞化される一方、旅行家イブン・ハウカル (Ibn Hawkal) は、978 年頃のこととして、バム地域に綿花が栽培されていたことを述べ、それが多量の水を必要とすることから、カナート・システムが行き渡っていたことを示唆する。1225 年ごろ賑わっていたことをヤクート (Yāqūt) は記しているが、歴史家ラシード・アッディーン (Rashid al-Din) は、1300 年頃、他のイラン都市とともにバムの衰退を嘆き、軍事活動による農業環境の荒廃を伝える (ibid.)。18 世紀、アフガニスタンへの橋頭堡としてある程度活気を取り戻す一方、アフガン人たちはペルシアを追われたのだった。

1840 年、旧市の南西に新市の建設が始まる。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、バムは大いなる繁栄を経験した。1900 年ごろの人口は約 13000 人、この地域では、はるか東方のクエッタ (Quetta) まで、これほどの商業都市はなかった。パーシー・サイクス (Percy Cyks) によると、バムはキャラバンサライを擁する一大商都としてケルマンと肩をならべていたという。新市には新たなバザールが生まれ、この繁栄が、市民をして旧市を遺棄させる結果を招くことになったらしい。

### バム城塞の震災前後

このバムの都市構成について H. ガウベ (Gaubе) は、

歴史家たちによる表記には誤解を伴うものも少なくない。中世ペルシアの地理についての二大業績の著者たち、P. シュワルツ (Shwartz) と G. ル・ストランジュ (Le Strange) が誤って理解した<sup>4)</sup> ことにより、わずかしかない中世バムについての記述の多くに、混乱や誤解が生じることになったと、次のように注意を喚起している。ムカッダシが 985 年に記録した詳細には、バムを地方首都 (カスバ qasba) と呼び、かつ町全体をバラド (balad) と呼んだ。カスバもバラドも シタデル (citadel) あるいはヒスン (hisn) の足元にあり、中央に城郭 (カラ qal'a) があってその中に金曜モスクがあったとする。結局、ヒスンはシタデルのことで、(qal'a) は「囲壁のめぐる内城」、ペルシアの地理書「フドウドウ・アル・アラム (Hudud al-alam)」では「シャフリスタン (shahristan)」に相当する。カスバ (Qasba) は都市機能、バラド (balad) は一般的な意味での都市を指す。さらに、「この都市 (バラド) には川 (ナハル nahr) があり、市の外縁部から生地商人バザールを経て内城に至り、そこから庭園に流れ出ていた」と、水路についてもムカッダシは伝える。結局のところ、地上 45m にそびえる中央城郭の下に、城壁に囲まれた内城あるいは今日言うところの「旧市」が、東西 425 m、南北 300 m の矩形に構えていた。今日の城郭は中世城郭の上

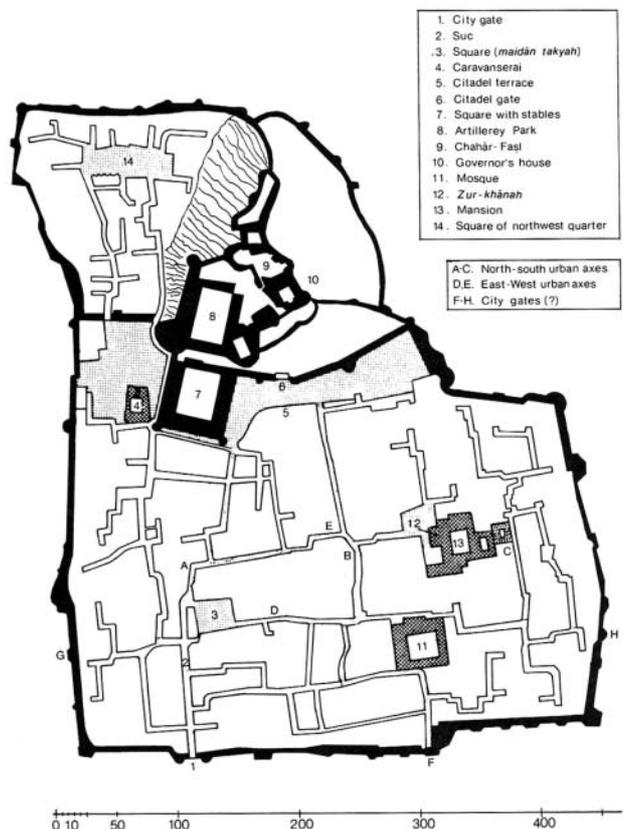


図3 バム城塞の内部構成

に築かれていることは間違いないこと、内城は回りの土地より5m高く、廃材の堆積を物語ると指摘する。最後に旧市の北西区画、つまり城郭の西麓175m四方ほどの部分は、18世紀の混乱でオアシス周辺の牧民たちが安全を求めて囲いの中に移ってきたものと見る。そして、今日のバムに見る都市景観は、以下の3要素からなると、ガウベは結論付ける。

1. バザールと金曜モスクを擁する要塞化された内城。
2. バザールや複数のモスクを含む城壁のない市街地。
3. 住宅の点在するオアシス農園。

そしてこれらを支えた稠密なカナート・システムまでを含め、その稀有な「文化的景観」が世界遺産にふさわしいと認められたわけである。

その上で、ガウベはバム旧市の内部構成を示す(図3)<sup>9)</sup>。そこでは、南面する唯一の城門と城郭を結び、かつバザー

ルが展開する南北の通りを第一の都市軸として強調するとともに、タキエ(Takiyah)広場と金曜モスクをつなぐ東西街路を第二の軸とし、富裕階層が住まいしたとみなしている。

このたびの震災は、以上のような長く分厚い歴史の堆積を、まだ一部分にしか過ぎないが、垣間見せる機会にもなったことは事実である。以下、主要な遺構の震災前後の比較を試みる。

南城壁の上から城郭方向を見渡す(図4)と、偽ドームや塔屋が崩落していることが顕著だが、その多くは近年の修復部分であり、城門など壁体表面が剥がれ落ちるように崩れていた(図5)。城郭部分では既舎建物の崩壊が著しい(図6)。兵舎の中庭から城郭頂部を望むと(図7)、まず兵舎上階の屋根構造が露わになると同時に、上方の擁壁が剥がれるように崩れ、その内側から城郭の基部をなす大



図4a、b 城砦主要部(南から)、震災前後(左が震災前、右が後)



図5a、b 唯一の城門(南から)、震災前後



図 6a、b 中央城郭から南西方面、震災前後



図 7a、b 兵舎庭内から望む城郭、震災前後



図 8 地震後中央城郭南西面に現れた石積み

振りの石積みのがぞく（図 8）。一見すれば城郭の最下層だが、拡張に伴う基礎地業かもしれない。このような壁の崩れをさらに北の方に追うと、厚い焼土層が連綿と続く（図 9）。中世のある時点で、大きな火災があったことを物語る堆積である。この時期がいつなのか、丁寧な調査だけでは今まで諦められていた歴史的事実が浮かび上がってくるに違いない。

旧市中に降りてくると、震災直前まで修復作業が行われていた金曜モスクの被災状況が、足場の鉄パイプもろとも瓦礫の中に崩れ落ち、印象的である（図 10）。そのほか、上部構造の崩れにより、屋根まで煉瓦で組みあがる多様な伝統構法の巧みさを、至るところで見せる（図 11）。周囲の城壁の崩落状況を見ると、その厚みの中ほどに長い亀裂が走ることに気づく（図 12）。部分的にそのような亀裂から外側が剥がれ落ちた壁面に、四角い柱形をくっきりととどめる古い壁面のファサードを見せる部分もある（図 13）。



図9 崩落面に見える厚い焼土層



図10a、b 城砦内金曜モスク、震災前後



図11 屋根組積の断面



図12 南面外城壁の亀裂



図 13 崩落により露見した旧城壁面



図 14 対岸の遺構カラエ・ドフタル



図 15a、b 氷室ドーム、震災前後

煉瓦サイズも大きく異なり、相当に古いだらうと想像させるが、上記の城郭焼土層と同様、厳格な編年に則った考古学調査を望みたいところである。

城壁の東方に、直径 20m 足らずの輪積み煉瓦ドームを載せたかつての氷室建築があり、震災前には完全に修復されて会議場として蘇っていたのだが、無残な形状に崩れ落ちてしまった（図 15）。

バムの旧市を離れ、ポシュト川を挟んで北側に、カラエ・ドフタルという日乾煉瓦ばかりでできた遺構があり、イランの人々にはサーサーン朝の創建と信じられている（図 14）。アルゲ・バムの年代同定に欠かせない遺構として注意しておきたい。こちらの方ももちろん震災を蒙ったわけだが、その崩れ方は軽微なもので、歳月を経て風雨にさらされてきた煉瓦の塊のような遺構が、耐震性をも持ち合わせていたことには驚かされる。震災前、修復事業が進められたアルゲ・バムの中であって、廃墟の形のままいっこうに手がつけられず放置されていた北西拡張部区画も、そ

れ以上の大きな崩れがほとんどなかったことを想起しておきたい。

#### ワークショップの成果

2004 年 3 月に実施されたユネスコ・ミッションの折、4 月 18 日のイコモス記念日に合わせ、「バムの文化遺産復興のための国際ワークショップ (International Workshop on the Recovery of Bam's Cultural Heritage)」が開催されることになった。主旨は、可能な限りの英知を集めて文化遺産としてのバムをどのような道筋で復興させるべきかという方策を見出そうとする試みであった。「テラ 2003」に集った研究者の多くが主催者の呼びかけに応じ、海外組 38 名を含む 90 名余がこのワークショップに参加した。日本からは、埼玉大学の渡辺邦夫教授と筆者がユネスコ招聘で出席した。ユネスコとイラン文化遺産庁と並んで、記念日の催しということでイコモス本部もこのワークショップの共同主催者だった。しかし本来なら「土の建築」国際専

門委員会が前面に出て寄与するべきところ、いまだ再建途上のため、本部事務局が直接関与する形をとった<sup>6)</sup>。

実質3日間の会議は、午前中全体討議とパネル、午後からはじめの2日間が分科会レポート、3日目の午後はバム宣言書の策定にあてられた。全体討議とパネルではつぎの5つのテーマが組まれた。

- 1) バムの文化遺産の特色
- 2) 文化遺産の震災被害
- 3) イラン文化遺産庁 (ICHO) とユネスコ、地震後の活動
- 4) 文化遺産復興計画
- 5) ICHO 今後の役割。

また、都合13テーマにわたる分科会では、筆者は初日「考古遺産と他の文化遺産との保存についていかに均衡を図るか」のグループに加わり、2日目は「地震によって新たに発見された考古資料を如何に扱うか」のグループでレポートを務めた。とくに後者では、イラン文化遺産庁 (ICHO) 考古学センターの現長官 M.アザルヌーシュ (Azarnoush) 氏、N. N. チェギニ (Chegini) 前長官、パリの CNRS から一時帰国の Sh. アデル (Adle) 博士という現イランの考古実力者各氏が頭をつき合わせ、さらにグルノーブルのクラテルからはウーゴ・ウーベン (H. Houben) 主任教授がこれに加わるという、稀有な構成メンバーによる議論は、筆者にとって思いのほか興味深いものであった。このグループによる討議結果は以下の通り。

- 1) 今まででは最小理解でかつ最大介入だったが、今後はこれを逆転させる。
- 2) この機会を考古、建築、保存各専門家が協働する好機と捉える。
- 3) 城砦及びその周囲全体が文化プロセスと遺跡形成を物語るとみなす。
- 4) 崩れの堆積は考古資料であり、それゆえ適切に調査しなければならないと考える。
- 5) 近年の周辺調査をふまえた「都市バムが世界遺産リスト登載に有力な新たな評価を獲得している」という総論を前提に、つぎの8項目を勧告する：

- ・最大限の遺跡理解を促す。
- ・崩れ堆積の正しい仕分けと調査を行う。
- ・統一された指揮のもとに複数の考古チームを編成する。
- ・収集される考古資料は現地の博物館で収蔵公開する。
- ・考古学調査を教育研修に活用する。
- ・城砦周辺市域の徹底調査を実施する。
- ・カナートその他の灌漑システムに注目する。
- ・城砦を含むすべての考古遺跡を野外教育の場として開放する。

さらに最終日には深夜に及んで次なる8項目が勧告案として取りまとめられ、予定されたワークショップは締めくくられた<sup>7)</sup>。

- 1) 遺跡とその環境を最大限に保存する。
- 2) 町と景観の特色を維持する。
- 3) 復興過程の中に遺産を調和させる。
- 4) 土の建築の伝統を保存する。
- 5) 震災に対する予防策を講じる。
- 6) 目標実現に向けて持続的に協働する。
- 7) 勧告事項。
- 8) 本宣言と勧告の実現意思と目的を持続させる。

上記8項目はまだ十分に肉付けされているとはいえ、修復事業と併行すべき考古学調査の計画とともに、人材や組織、資金面などの裏づけを伴った長期計画が早急に求められる。

#### むすび

上記ワークショップの前後、バム復興と「土の建築」というテーマは国際的な関心事としてクローズアップされ、国際会議や報告が相次いだ<sup>8)</sup>。2005年1月現在、筆者自身が確認したわけではないが、現地では建築修復班と歴史考古調査班がそれぞれ3グループずつ編成されていると聞く。さきの宣言が極力遵守されることを望みたい。

以上のように、震災という大事は、建築的にも、都市史のうえでも、そして何よりも歴史考古学の面で多くの課題を私たちに投げかけた。多くの犠牲者を出した今日の市街地の復旧は1日でも急ぐべきだが、もともと無住となっていた遺跡の復興を急がねばならない理由があるのかどうか、慎重に検討するべきではないだろうか。

#### 註

- 1) 報告は以下の項目にわたる：1) Seismotectonic, Seismicity and Seismic Hazard of Bam Area, 2) Strong Ground Motion, 3) Structural Damage, 4) Risk Management and Disaster Response, 5) Human Disaster, 6) Geotechnical Aspects of the Earthquake.
- 2) ここでの記述は主としてガウベの業績 (Gaubé 1979) により、*Encyclopaedia Iranica*, vol. III (1989) pp. 650-4, London, Rartledge and Kegan Paul, および *Encyclopedia of Islam*, pp. 640-1, Leiden, E. J. Brill を参照した。
- 3) ユネスコ世界遺産委員会公表の推薦文書によると、バム近郊で前2世紀に遡るカナートが確認されているという。これが事実なら、アケメネス朝にまで遡らないにしても、バムの歴史はサーサーン朝よりもはるかに古くなる可能性を有する。
- 4) ガウベが挙げているのはル・シュトランジュとシュワルツ (Strange 1966; Shwartz 1969)。
- 5) ガウベはこの図がどのようにして得られたかを明記していない。種々公表されている地域計画用の地図や航空写真から作成することは難しくないが、少なくともイラン側の説明による限り、旧市について正確な測量はいまだ行われていないという。

- 6) イコモスの世界組織は、パリ本部の執行委員会と各国内委員会代表から成る諮問委員会のほか、多彩な分野ごとに「土の建築」など21の国際専門委員会が組織されている(別掲1)。必ずしもすべてが活発な活動を展開しているわけではないが、なかでも「土の建築 Earthen architecture」委員会は休眠状態にあったため、つい最近本部執行委員会により新たな委員の選考方法を軸とする再建築が提示されたばかりである。バムの一件が停滞していた流れを一気に促したといえる。
- 7) 実際にはその日のうちに参加者の完全な合意が得られたわけではなく、確定した文書が筆者に届いたのは10月になってからのことであった。したがって昨年6月の時点で公表した本学会レジュメ掲載文とは若干異動がある。参考までに最終の英文見出しを示しておく(別掲2)。
- 8) 残念ながら筆者が参加して新たな情報を共有するには至っていないが、参考までに概要のみ紹介しておきたい。
- (1) Information - UNESCO's Response to the Earthquake in Bam (19 October 2004, by the UNESCO Tehran Cluster Office) : 地震発生時から2004年10月まで、ユネスコから発せられたメッセージ、調査報告など10件(4月のバム宣言文書を含む)をユネスコ・テヘラン事務所がとりまとめた。
- (2) Mission Report - The State of Conservation of the World Heritage property of Bam and its Cultural Landscape & Preparation for the First Session of the International Steering Committee & Proposed International Cultural Heritage Conference for Bam (10 October 2004, by UNESCO Tehran Cluster Office) : 世界遺産に登録した後の状況調査と9月にローマで開催されたバムの保存に関する国際会議の準備について、ユネスコ・テヘラン・事務所が報告する。
- (3) Bam Citadel (Iran) - Advisory Body Evaluation (No. 1208), endorsed by the World Heritage Committee at its 28th session in Suzhou, China, in July 2005 (June 2005, by ICOMOS) : 2004年世界遺産会議への登録審査資料。5月11日付イコモスが提出した文書。
- (4) Mission Report - UNESCO-ICHO Joint Mission to Bam and its Citadel, Kerman Province, Islamic Republic Iran, from 22-26 January 2004, including three annex reports by Consultants (unknown date, probably edited by UNESCO Tehran Cluster Office) : 震災後、ユネスコが派遣した最初の調査団報告。日本からは渡辺教授が参加。
- (5) Mission Report - UNESCO-ICHO 2nd Joint Mission to Bam and its Citadel, Kerman Province, Islamic Republic of Iran, 11-19 March 2004 (3 July, 2004, by UNESCO & ICHO) : ユネスコが派遣した第2回目の調査団報告。日本からは筆者が参加。
- (6) International Seminar on Seismic-Resistant Earthen Architecture for the Reconstruction of Bam (6-10 September, L'Isle d'Abeau, France) : 「土の建築」の耐震性に関する国際セミナー。フランス、グルノーブル建築学院が主催した国際セミナー。
- (7) International workshop - "Earthquake-resistant construction and conservation with local materials in Central Asia" (1<sup>st</sup> - 2<sup>nd</sup> November 2004, Bauhaus University Weimar,

International Conference Centre) : Terra 2003 および4月のワークショップに参加していたワイマール・バウハウス大学H. シュレーダー教授らが呼びかけ、中央アジアの伝統的建築材料、すなわち建材としての「土」の耐震性を主題とした会議。

- (8) 「2003年12月26日イラン・バム地震被害調査報告」(土木学会 2004)。
- (9) 「2003年12月26日イラン・バム地震被害調査報告」(日本建築学会 2004)。

- (別掲1) イコモス国際専門委員会 INTERNATIONAL SCIENTIFIC COMMITTEES 一覧
- Study and Conservation of Earthen Architecture (土の建築)
- Stone (石造遺産)
- Cultural Tourism (文化的観光)
- CIPA - Heritage Documentations (遺産記録・写真測量)
- Wood (木造遺産)
- Historic Gardens - Cultural Landscapes (歴史的園地・文化的景観)
- Vernacular Architecture (民家建築)
- Rock Art (石造芸術) Historic Towns and Villages (歴史的集落・町並み)
- Stained Glass (ステンドグラス)
- Archaeological Management (考古遺跡管理)
- Economics of Conservation (保存の経済)
- Underwater Cultural Heritage (水中遺産)
- Analysis and Restoration of Structures of Architectural Heritage (構造分析・補強修復)
- Legal, Administrative and Financial Issues (法と行財政)
- Cultural Itineraries (文化的街道)
- Polar Heritage (極地遺産)
- Wall Paintings (壁画)
- Risk Preparedness (危機管理)
- Shared Built Heritage (植民地建築)
- Training (研修)

- (別掲2) Declaration and Concluding Recommendations of the International Workshop for the Recovery of Bam's Cultural Heritage (17-20 April 2004, Bam, I. R. of Iran)
- (1) Conserving the full significance of Arg-e Bam and its setting.
- (2) Conserving the character and heritage of the city and landscape.
- (3) Integrating heritage in the recovery process and the future development of Bam.
- (4) Preserving and enriching the tradition of earthen architecture.
- (5) Protecting and preventing damage to earthen heritage in seismic areas.
- (6) Sustaining co-operation to realize the conservation goals.
- (7) Recommendations
- (8) Sustaining the momentum and focus to implement the present Declaration and Recommendation.

#### 参考文献

Gaube, H. 1979 *Iranian Cities*. New York, New York University

Press.  
Le Strange, G. 1966 *The Lands of the Eastern Caliphate*. London,  
Frank Cass.  
Shwartz, P. 1969 *Iran im Mittelalter*. Hildersheim, G. Olms Verlag.

土木学会 2004 「2003年12月26日イラン・バム地震被害調査報告」  
『土木学会誌』89/4 47-50頁。  
日本建築学会 2004 「2003年12月26日イラン・バム地震被害調査  
報告」『建築雑誌』119/1521 111-114頁。

岡田保良  
国士舘大学イラク古代文化研究所  
Yasuyoshi OKADA  
Institute for Cultural Studies  
of Ancient Iraq,  
Kokushikan University